

第 144 回日耳鼻栃木県地方部会学術講演会プログラム

担当 獨協医大

日時：2024 年 9 月 7 日（土） 14：00～

場所：獨協医科大学 研修会議棟 ゆうがお（肉のふきあげ雅 2 階）

参加費：2,000 円

※日耳鼻 IC カードにて単位登録を行います。IC カードをご持参ください。

● 一般演題 14:00～14:30 (発表7分 討論3分)

第Ⅰ群 座長 中山 次久(獨協医大) 14:00～14:30

1. 当院で経験した MEN1 型に伴う原発性副甲状腺機能亢進症の 4 例
○吉田健太郎、今井貫太、今野渉、中島逸男、平林秀樹、中山次久(獨協医大)
2. 進行頭頸部癌に対する放射線単独療法の意義
○加藤大星、横島一彦(栃木県立がんセンター)
3. 免疫チェックポイント阻害剤を使用した頭頸部癌患者においてプロトンポンプ阻害薬が予後に及ぼす影響について
○小口慶悟、笠原健、佐藤陽一郎、佐々木彩花、辺土名貢、目代佑太郎、井澤幹、新田清一(済生会宇都宮)

休憩 14:30～14:40

第Ⅱ群 座長 平林 秀樹(獨協医大) 14:40～15:20

4. 自治医科大学喉頭外来での音声機能検査の実施状況
○清家尚真、野澤美樹、松山浩太、五十嵐丈之、伊藤真人、金澤丈治(自治医大)
5. 頸椎の弯曲のため経口的輪状咽頭筋切断術が施行できず、外切開で切断して経口摂取可能となった一症例
○和泉光倫、大久保啓介、伊藤惇郎(佐野厚生総合)
6. 外転型痙攣性発声障害に対して声帯内コラーゲン注入術を行った 1 例
○弓田健斗、嵐健一郎、稲木香苗、佐々木俊一(足利赤十字)
7. 終末期に合併した嚥下障害の検討～お楽しみ摂取は生命予後に影響するか～
○此枝生恵、佐々木俊一(オトクリニックわたらせ)

【 発表される先生方へ 】

- ① 発表データは USB メモリーに保存してご持参ください。
- ② Mac を使用する場合は必ずご自身のパソコンをお持ち込みください。
- ③ 会場で使用する映像出力端子は HDMI です。パソコンに HDMI 端子が付いていることをご確認ください。付いていない場合は接続用の変換ケーブルをご準備ください。

- 休憩 15 : 20～15 : 35
- 会務報告 15 : 35～15 : 40
- 保険診療 15 : 40～15 : 45
- 製品紹介 15 : 45～16 : 00 『 デュピクセント 』 サノフィ株式会社
- 教育セミナー 16 : 00～17 : 00

座長 中山 次久（獨協医大） 耳鼻咽喉科領域講習（1 単位）

『Clinical remission を目指した難治性鼻副鼻腔炎治療』

東邦大学医療センター大橋病院

耳鼻咽喉科 教授 吉川 衛 先生

共催 サノフィ株式会社

※開始 5 分以降の入室と終了前の退室は、領域講習の単位認定が出来ませんのでご注意ください。

- 会員懇親会 17 : 00～18 : 30 会員懇親会

※軽食とお飲み物をご用意しております。

一般演題抄録

第 I 群 座長 中山 次久（獨協医科大学）

14：00～14：30

1. 当院で経験した MEN1 型に伴う原発性副甲状腺機能亢進症の 4 例

○吉田健太郎、今井貫太、今野渉、中島逸男、平林秀樹、中山次久（獨協医科大学）

原発性副甲状腺機能亢進症の原因の一つとして、MEN(multiple endocrine neoplasia)1 型が知られている。MEN1 型では手術方法や経過が異なるため、術前の診断が重要である。当院で経験した 4 例の MEN1 型による原発性副甲状腺機能亢進症について、文献的考察を加えて報告を行う。

2. 進行頭頸部癌に対する放射線単独療法の意義

○加藤大星、横島一彦（栃木県立がんセンター）

根治的治療が困難な進行頭頸部癌患者には放射線治療が検討されるが、その効果に一定の見解がない。そこで、放射線治療を施行した 10 例(A 群)と、緩和ケアのみを行った 11 例(B 群)の生存期間と食餌摂取量の変化を比較した。生存期間の中央値は A/B 群=514/74 日であった。A 群では嚥下機能低下や味覚障害が遷延した症例を認めた。緩和的放射線療法の適応の判断にも有害事象を考慮することが重要と考えられた。

3. 免疫チェックポイント阻害剤を使用した頭頸部癌患者においてプロトンポンプ阻害薬が予後に及ぼす影響について

○小口慶悟、笠原健、佐藤陽一郎、佐々木彩花、辺土名貢、目代佑太朗、井澤幹、新田清一（済生会宇都宮病院）

様々な癌種においてプロトンポンプ阻害剤（以下 PPI）の使用が、免疫チェックポイント阻害剤（以下 ICI）の効果を減弱することが報告されているが、頭頸部癌領域での報告は非常に少ない。今回我々は、ICI を使用した頭頸部癌患者において PPI が予後に及ぼす影響に関して検討を行った。PPI 使用患者は PPI 非使用患者と比較し、有意に全生存期間が短かった。PPI が予後に及ぼす影響につき文献的考察を踏まえ報告する。

4. 自治医科大学喉頭外来での音声機能検査の実施状況

○清家尚真、野澤美樹、松山浩太、五十嵐丈之、伊藤真人、金澤丈治（自治医科大学）

当科では2021年4月から2023年7月の間に空気力学的検査や音響分析などの音声機能検査を合計142名に行った。疾患は、声帯麻痺54名、声帯萎縮29名、機能性発声障害20名、痙攣性発声障害13名、声帯結節9名、声帯ポリープ9名、その他20名であった。声帯萎縮・声帯麻痺で男性割合が大きく、声帯結節・痙攣性発声障害で女性の割合が大きかった。これらの結果から音声機能検査の有用性につき報告する。

5. 頰椎の弯曲のため経口的輪状咽頭筋切断術が施行できず、外切開で切断して経口摂取可能となった一症例

○和泉光倫、大久保啓介、伊藤惇郎（佐野厚生総合病院）

症例は74歳男性。21歳時に滑落事故で脊髄損傷（C7）で対麻痺となった。73歳時にCovid-19に罹患後に経口摂取困難となり胃瘻増設。その半年後に当科紹介。脊椎の弯曲のため輪状咽頭筋が明視下におけず、喉頭挙上術を施行した。嚥下リハビリを1ヶ月行うが、食事摂取不能だった。外切開で輪状咽頭筋切断術を施行し、少量食事摂取可能となり転院した。FK-WOで展開困難な症例について過去の報告を踏まえ考察する。

6. 外転型痙攣性発声障害に対して声帯内コラーゲン注入術を行った1例

○弓田健斗、嵐健一郎、稲木香苗、佐々木俊一（足利赤十字病院）

外転型痙攣性発声障害(spasmodic dysphonia; SD)は発生頻度が少なく、適応となる加療に難渋する疾患である。今回、本疾患に対して声帯内コラーゲン注入術を行った1例を報告する。症例は電話対応業務の多い30代男性で、1か月続く嗄声で受診。サ行・ハ行で嗄声があり、披裂部・後方優位の声門閉鎖不全を認め外転型SDと診断し、両声帯内コラーゲン注入術を施行。術後声帯粘膜波動は良好であり、4か月間増悪なく経過。若干の文献的考察を加え報告する。

7. 終末期に合併した嚥下障害の検討～お楽しみ摂取は生命予後に影響するか～
○此枝生恵、佐々木俊一（オトクリニックわたらせ）

前勤務地・川崎市立井田病院は緩和ケア病棟を併設しており、主治医からの依頼により終末期患者を対象として VE/VF による嚥下評価をしばしば行っていた。経口摂取困難と評価しても、患者本人が経口摂取を希望した場合、肺炎誘発や予後短縮の可能性を説明のうえ許可する場合も多い。重度嚥下障害を合併した終末期患者が経口摂取を継続することがどの程度肺炎のリスクを高めたり、予後に寄与するのか、後方視的に振り返り検討した。